

平成 年 月 日

関係者各位

「蔵王スター・タケダワイナリー」を存続させる為
「上山市裏町字大石蔭新清掃工場建設構想の撤回」を求める要求書への
署名にご協力下さい

タケダワイナリーがその起源である葡萄園でワインを造り始めたのが1920年。以来、「良いワインは良い葡萄から。」をモットーに葡萄作りワイン作りに日々取り組んできました。20年の歳月をかけて土壌改良を行い、15ヘクタールの自家農園での自然農法栽培、環境保全型農業、ビオロジック農法等、低農薬で化学肥料を使用しない葡萄栽培を行っています。地域に根ざし葡萄を愛しワイン醸造に全てを掛けたタケダワイナリーがこの度の「上山市裏町字大石蔭新清掃工場建設構想」で廃業の瀬戸際に立っています。

ごみ問題・下水道問題は我々には避けては通れない大切な問題です。しかしながら我々の口に入る大切な葡萄の恵みをお客様や生産者に一部至りとももの不安を残してはいけません。安心して生産者の見えるものづくりこそ後世に残す文化だと確信しております。

「蔵王スター・タケダワイナリー」を存続させる為、「上山市裏町字大石蔭新清掃工場建設構想の撤回」を、事業主体である山形広域環境事務組合に対し要求すべく、署名活動を行います。つきましては、一人でも多くの方々にご賛同いただき、署名協力下さいますよう、心よりお願い申し上げます。

要求者 蔵王スター・タケダワイナリーを守る会

代表 やまがた酒彩倶楽部 会長 田中浩一（山形市 ワラヤ酒店）

山形は多くの恵まれた自然により果樹・野菜・肉・米そして酒どころと、美味しいものが溢れる素晴らしいところです。その土地に根ざした文化が山形の宝であり日本に誇れる財産ではないでしょうか。土壌と葡萄の恵みそのまま、無添加ワイン“サンスフル”。洞爺湖サミットで各国首相に喜ばれた世界に誇れる本格的な発泡ワイン“キューベ・ヨシコ”を失ってはいけません。

発起人

アルケッチャーノ オーナーシェフ

奥田政行（鶴岡市）

私がまだ山形の食材のおいしさに確信がもてず、自分の料理につまづいていた時に出会ったのがタケダワイナリーのワインでした。日本のワインがここまでおいしくなるのかと思ひ、体が震えました。そして、その製法を聞き、時間をかけて畑の土を改良してきたことの武田家のこだわりにも共感してきました。このこだわりは半端なことではなく、タケダワイナリーをお手本とした日本のワイナリーも多く、日本のワイン界や料理界に与えた影響ははかり知れません。お金で買えない唯一のことが時間だと思っております。

今の日本の農業がかかえる TPP の問題は、江戸時代の鎖国を解いた時と同じで受け入れざるを得ない事だと、私は思っています。そして、これから先の日本の農業を考えた時に日本の宝として、誇りとして、そして国際社会への日本の武器として、タケダワイナリーのあり方がひとつの指針となります。

私は、山形が先頭となって日本の農業を元気にするために、命をかけるつもりです。今回のごみ焼却炉の問題は必ず雨となってタケダワイナリーの葡萄の上に降り注ぎます、そうしたら、タケダワイナリーの人達は今までと同じように自信をもって葡萄のことを説明できるのでしょうか？

日本の未来の為、もう一度再考をお願いします。取り返しがきく今のうちに、なくしてしまう前に、勇気ある決断をしてください。日本の為にもどうぞよろしくをお願いします。そして、上山から鶴岡から山形から一緒にがんばりましょう。

（社）日本ソムリエ協会認定ソムリエアドバイザー 横山広信（山形市 小島洋酒店）

上市市でのごみ焼却炉建設構想について、場合によっては蔵王スター・タケダワイナリーが廃業するかもしれないという話を聞いて、私はとても心配で悲しい気持ちになりました。タケダワイナリーさんは、山形県の地元ワイナリーの中でもリーダーシップ的な存在に位置しており、全国でも引っ張りだこの超有名銘柄に成長したと認識しております。

もしこのタケダワイナリーが廃業などと言う事に追い込まれるようなことになったら、契約している農家の方々、私達酒類業界の生活にも大きな影響を与えます。なにより、とても悲しいです。この自然に囲まれた歴史を後世に伝え続けるためにも、構想の撤回を要求します。

葡萄栽培家 蔵王青果出荷組合 代表 古頭 孝 （上市市）

葡萄栽培家 千布果樹出荷組合 代表 花輪和雄 （天童市）

（株）パレス平安 取締役 武田靖子 （山形市）

ワイン愛好家 斎藤マシン工業（株）代表 阿部光成 （天童市）

2010年12月

皆さまへ ご協力をお願いします

有限会社 タケダワイナリー 代表取締役社長 栽培・醸造責任者 岸平典子
タケダワイナリー 社員一同

この度、山形県内の各界の方々にタケダワイナリーの存続をもとめ、上山市裏町大石蔭新清掃工場建設構想の撤廃に声をあげていただき、誠に感謝申し上げます。

なぜ、清掃工場建設がタケダワイナリーの事業存続への障害になるのか？と思われる方もいるかもしれません。

それは、私達の葡萄造りが環境保全型農業で、無化学肥料、除草剤を使わず自然のサイクルを重視した自然農法を貫いていること。また、ワイン造りでも自生酵母の使用や添加物を使わない、できるだけ自然なワイン造りを信条としていることに起因します。

新清掃工場の候補地は、私達の畑から800m、ワイナリーからも1kmも離れていない場所です。最近の清掃工場がもたらす環境汚染はほとんどなく、安心であると行政はいいいます。しかし、焼却煙から出るダイオキシンや重金属などはゼロではありません。また、日本の環境基準はヨーロッパと比べると、大変緩いものであるのが現状です。それに、清掃工場がもたらす環境汚染の無害・有害性に関しては、科学の進歩で日々見解が変わっており、専門家の評価も定まっていません。

そんな環境下でできたワインを、今までと同じように“自然農法”“自然なワイン”と言って、消費者の方々に届けることができるのでしょうか？

私達のワイン造りに共鳴をし、年間30万本のワインを買ってくださる沢山の方々に嘘はつけないのです。私達はいままで、県産葡萄のみを使い、自社畑では自然な葡萄造りを貫き、“海外原料を使っても国産ワイン”という日本ワインの現状をととても憂いてきました。ですから、今回は私達が嘘をつかない番なのです。嘘をつかないで、この環境下でワイン造りは続けられないのです。

もし、新清掃工場がこの地に来た場合、私達は「行政から廃業に追い込まれた、90年の歴史をもつワイナリー」として、行政に強く訴えてゆくつもりです。

しかし、私たちは廃業するわけには行かないのです。100年近く維持し、土づくりを続けてきた葡萄畑をまもる義務があるからです。

また、年間300tの葡萄を買い付けている、上山市、天童市の農家の方々の生活を守る責務があるからです。加え、5代前の武田猪之助の時代から、綿々と続けてきた地元雇用の維持という使命を反故にできないからです。

それから、末尾に一部抜粋で記しました様に、行政各機関よりこれままでの業績を評価いただき、さまざまの褒賞を頂戴してまいりました。“それを与えた行政当事者から、廃業に追い込まれた”などと言う事態は、行政側にとっても避けなければならないからです。

ごみは私達全員が排出します。ごみの問題は、皆避けて通れない問題です。ですから、なぜ行政は周辺企業への聞き取りはおろか、住民への説明も何もなく勝手に候補地を決めたのか？行政側の独善的な行為に対し、異議を唱えているのです。

また、ごみの減量、分別、リサイクルは皆で考える問題で、行政の押し付けではうまくゆきません。環境負荷の大きい“ごみ焼却施設建設”ありきではなく、バイオマス構想、生ゴミの堆肥化などなど環境を保全しながら、第3の道を進み始めた自治体もあるのです。なぜ、そのような議論を市民皆で行うことを行政は回避するのでしょうか。

タケダワイナリーは農業とワイン造りを通し、環境問題を以前から考えてきた企業です。市民参加・協働によるごみ処理計画の策定を目指して行きたいと考えています。

どうぞ、皆様タケダワイナリーを廃業に追い込まないよう、お力を貸していただければ幸いです。

過去のタケダワイナリー褒賞など（抜粋）

- | | |
|--------------|--|
| 1987年 11月 3日 | 「山形県産業賞」 |
| 2003年 10月 1日 | 「上山市功績賞」 |
| 2005年 4月 10日 | 第46回 I D B 沖縄総会レセプションにて「ドメイヌ・タケダ《キューベ・ヨシコ》」を財務省が使用。 |
| 2008年 7月 | 洞爺湖サミットにおいて、「ドメイヌ・タケダ《キューベ・ヨシコ》」を乾杯用として国が、使用。 |
| 2008年 11月 | 「シャトータケダ赤2004年」をソムリエ世界チャンピオンオリビエ・プシェ氏が4.5点（5点満点）の評価し、仏ワイン雑誌にも掲載。 |
| 2009年 4月 | 経済産業省「2009年元気なもの作り中小企業300社」で当社を選定。 |